



# 極樂門

遊步

男がひとり極楽門の前に立っている。門は男の背丈のより少し大きいほどで、そのくたびれ具合がどれほどの年月を佇んできたか物語っていた。雨風に叩かれ剥がされ見るも無残な木の支柱はまるで老婆の枯れた腕みたく、よれていて汚らしい。僅かに残る「極楽門」の文字が金の漆を纏ってわずかに建築物としての尊厳を保っていたが、まるで羞恥心そのものであった。この門がどうして建てられたかは知られていない。そもそもとして、建てられている場所にも問題がある。そこは人の住む場所であるのかと疑うほどの寂れた村の外れに建てられている。何もない、強いて言うならばその寂れ具合が見世物であるほどの村から、さらに手つかずの自然を打ち倒しながら山道を進み、あと一步間違えれば溪流へと真逆さまに落ちるであろう崖っぷちの行き止まりに建っている。門をひと跨ぎでもすれば濁流に呑まれ、あれよあれよと魚の餌に違いない。男が何故そのような辺鄙な地のまるでゴミ捨て山の主のような門を見つけられたのだろう。それには男の生い立ちについて話さなければならぬ。

男が物心ついた時から既に世間は彼の敵であった。成す事すべてが気味悪がられ、友人のひとりもできず、ますます深まる他者からの蔑みの哀れみにも似た見下した扱い。男は幼心にして死ぬまで自分は異端者扱いされ忌み嫌われる人生を歩むのだらうと覚悟した。人というものは理解できぬものを当然のように排除する。誠に正しい。しかし、その事実気が付くのは排除された側の人間ばかりであり、その秘密は人から人へと渡り歩くことはまず有り得ない。男も辛抱強い方であった。人格が容姿が言動が全て理解されない孤独感と、幸いな星の元に生まれた者に対しての嫉妬を何十年も己の中で飼い殺し遂に表に出すことはなかった。苦しく希望のない生の道を歩み続けることは、いかなる死に様よりも惨いものであり、渴き切った心は潤いに飢え瘦せ細り、まるで生きる屍のようだった。そんな男がどうして今まで生きることを諦めなかったか。それは男の心の支えは夢のようなる大逆転、これまでの鬱憤すべてを帳消しにする程の番狂わせが起きることを本気で信じていた。この劣悪な環境は試練であり、耐えに耐え抜いた先に救いがあるに違いないと男は信じて疑わず毎日を呪いながら生きた。酒も博打もせず、どこぞの神を祈り瞑想祈禱に時間と金を惜しまず遙か昔の聖人君子の生き様を真似た。

男が悟りを開く真似事を始め数年が経ったころである。男は未だ神に救われてはいなかったが初めて友人と呼べる存在ができていた。出会いこそ遅かったにしろ男にとって気の許せる信頼できる人間というものは男にとってようやく人生の楽しさというものの片鱗を見せてくれていた。まだまだ人生捨てたものじゃない、と。男は心で人間讃美歌を歌い、なんとも楽しそうに性善説を読みふけてはしきりに頷いていた。哀しく阿呆である。男の友人というものは、それまた奇天烈で世のあぶれものであった。云うならば同じ穴の貉である。卑屈で頭が悪く根っからの日陰者というものが彼らの共通点であり、互いに互いを見下して少しでも優越感に浸りたいが故の浅はかな友情であった。化けの皮はすぐに剥がれた。ドブのようなゴミ溜さながらの底辺層でも争いは起きるもので、また階級というものも常につきまとう。そして、やはり勝者と敗者も生まれる。男はどこまでいっても敗者であった。人生に勝敗などなくいかに自分を信じることができるかこそが他者からの侵食に承えうるものなのだが男はどこまでいってもそれがわからなかった。

それは夏の日のことであった。男は友人に誘われ町に出た。そこは海が近く漁業と貿易とで活気に満ちた港町で、何かと騒がしい場所であった。金を持たない二人は特に何をやる訳ではないが、町をぷらぷらと練り歩いていた。唯、暇なのである。しかしながら、男は少し金を持っていた。日を暮らすことで精一杯の生活であったが、実りの良い仕事にたまたま出会えたのであった。どれ、たまには寿司でも、と看板の出ている店に友人を連れ暖簾をくぐった。なにさ、金は私が持とう。ただし、限度があるぞ。ははは。と気前の良いことを言って友人を椅子に座らせた。男は上機嫌であった。しかし、それは共に美味しい物を食べることへの喜びから発する感情ではなかった。素寒貧の貧乏人に飯を奢ること。小さな虚しい優越感であった。おいしかろう、タダで食う寿司はおいしかろう。無論、その思慮に友人が気がつかぬ訳もない。そして、我慢ができる人間でもない。なにせ、男がたまたま一日だけ運に恵まれていただけで、そもそもは同じ穴の筈なのだから。先んず、手が出た。浅はかである。それだけでは怒りは収まらず、倒れた男の顔を踏みつけ、懐から財布を奪い店を出ていった。雑踏に紛れてしまえば追うすべも無く、すぐに町を出て行ってしまおう。残された男は怒りに打ち震えていた。善意を、慈悲を、なんて無礼な輩であることか。この点においては男に分があることは間違いがない。しかし、顔を真っ赤にしていようと、揉め事が収集するわけではない。店主がこの無一文を逃がすまいと男の肩

を強く握っていた。無銭飲食の罪は鞭打ちとなって男の身に降り注いだ。男は罪人となった。愚か者の行き着く先はわかりやすい。男も漏れることなく人生の放棄、自決を選ぼうとした。まったく、これまで歯を食い縛って生きてきた非難轟々の時間はまるで何のためであったのか、死ぬならばさっさと死んでしまえばいいものの男はまた中途半端に死んで行く。男はこの期に及んでも意気地がなく死んだ先を考え心地よく死ねる場所を根気良く探していた。旅人から面白い話を聞いた。「この門をくぐり抜け死せる者は極楽浄土の門をくぐったも同然である」この謳い文句こそが極楽門、どこぞの田舎に昔祀られていたそうである。男が飛びつかぬわけがなかった。話を聞くうちにこの門の正体が掴めてきた。その昔は地元の山に住むと云われている土地神を祀るためのものだったという。どうか死後、極楽に案内くださいますようにと冥土への玄関口として建てたのが始まりであった。この門をくぐり土地神に道案内をしてもらえば前途不明なあの世の道も迷うことないだろう、ということだった。しかし、時代とともに信者の数も減り、手入れはされずただ雨風の好きな様にされるようになってしまっていて幾年。今では地元の間人ですら極楽門の存在を知らない者もいるという。それでも男は極楽への案内人を信じてすぐる様に門の元へと向かった。

そして話は冒頭に戻る。いざ門を前にしたところでやはり心揺れ動くところがこの男。悩みに悩み、意を決したつもりがすぐ揺れる。男は寂れた門を前にし、座りこんでしまった。

山は静かなり、眼下に見える溪流が来いよ来いよと騒ぎたてど木々は黙するだけで石は忍び、土は控え、静かにそこにいるだけだった。しかし、男は段々と川の声に耳を傾けていった。川は騒ぎ囃したて男を踊らせる。男はのせられるように立ち上がり、覚束ない足取りで門へ足を踏み入れた。門は小さいもので腰を屈めなければくぐれない。男は慎重に中腰になり首だけそおうと門から出してみた。あっという間には落としてくれない高さの下では怒涛の波紋が唸り声を上げて待ち構えていた。男は心底から恐怖した。この土壇場においても男は何も背負えず自分の死に様すら決められないということを見事証明した。そして、男には人よりずいぶん多く持ち合わせて生まれたモノがある。不運だ。

死の恐怖に竦んだ足は震えを加速させ、腰を砕けさせた。体勢を崩しそうになるところをなんとか門の縁を掴み体勢を整えようとするが、長い年月を打たれた門にそのような強度はもはや残っていなかった。木が引きちぎれる嫌な音とともに、門は溪流へと重力に身を任せながら傾いていった。男は必死に地面にしがみついたが門の重さに押されて、引き連られるように崖を真っ逆さまに落ちていった。門と男、抱き合うようにして川面へ落ちる。遂に男はなにもかも中途半端に終わった。水面に打ち付けられた衝撃で男は事切れ、門の重さによって川底へと沈んでいった。

男が切り拓いた道に人影が見える。体格から察するに若い女のようなようだった。女は滑るようにして険しい山道を登る。まるで地に足がついてないかの如くの動きであった。女はそれから迷うことなく極楽門の建っていた場所へと辿り着いた。いや、その跡地を通り過ぎて崖っぷちから溪流へと身を投げた。女は頭から真っ逆さまに落ちて行くが顔に焦りの様子もなく無表情に風を受けている。落下。しかし派手に落ちた割には、何故か不思議と水飛沫は上がらなかった。女は平然と水中を自在に動き極楽門に掴まれたままの男の元へ一直線に向かった。もし、この世に人魚が居るならば、この女こそがそうであろう。女は男と門の周りを何度か周遊すると男の頭へ近寄った。女の手が男の首へと伸び、優しく何度か撫でると男の頭が胴から離れ、首は大量の血が吹き出しそこらに霧散した。赤く濁った水中で女は頭を大事そうに抱えるとゆっくりと上昇し、川を飛び出し雲の中へと消えて行った。